

ダニエルの書 - 番号百二十

預言のしるしを解き明かす：聖書預言の成就を理解する

Jeff Pippenger

2024-03-06

太陽、月、星に象徴されるしるしの成就については、歴史家たちやアドベンチズムの開拓者たち、そしてホワイト姉妹の著作を通して十分に論じられてきた。イエスが取り上げられたしるしの中には、他のものほどなじみのないものもある。『地』における『諸国の苦難』に具体的な成就があったことを認識している人はほとんどいない。彼らは、地の諸力が揺り動かされることとの対比として、『天の諸力』が揺り動かされるという象徴が何を意味しているのかも明確ではない。そして、ラオデキヤのアドベンチストで、『雲に乗って来る人の子』の『来臨』がミラー派の歴史において成就したことを理解している者はほとんどいない。

キリストの再臨の正確な日と時は明らかにされていない。救い主は、ご自分でも再臨の時を知らせることはできないと弟子たちに告げられた。しかし、彼は、その到来が近いことを知るためのいくつかの出来事について述べられた。「太陽と月と星にしるしが現れるであろう」と彼は言われた。「太陽は暗くなり、月はその光を放たず、天の星は落ちる。」また、地上では「当惑する諸国民の苦難があり、海と波はとどろき、人々は恐れあまり、また地上に起ころうとしている事柄を思っ気て気を失うであろう」と彼は言われた。

「そして、人々は、人の子が力と大いなる栄光をもって天の雲に乗って来るのを見るであろう。彼は大いなるラッパの響きとともに御使いたちを遣わし、彼らは四方から、天の果てから果てまで、彼が選んだ者たちを集めるであろう。」

太陽、月、星に現れるしるしは成就した。その時以来、地震、暴風雨、津波、疫病、飢饉が増え続けている。火災と洪水による最も恐るべき破壊が、次々と起こっている。週ごとに起きているこれらの恐るべき災害は、終わりが近いこと、まもなく必然的に大いなる決定的な出来事が起こることを、切実な警告の調子で私たちに語りかけている。

猶予の時は、もはや長くは続かない。今や、神は地上からその抑えの御手を引かれつつある。久しく、神はその聖霊の働きを通して人々に語りかけてこられた。しかし彼らはその呼びかけに耳を傾けなかった。今、神はその裁きによって、ご自身の民にも世にも語っておられる。この裁きの時は、何が真理であるかを学ぶ機会をまだ持たなかった者たちにとっての憐れみの時である。主はいつくしみ深く彼らを顧みられる。主の憐れみの御心は動かされ、救うための御手はなお差し伸べられている。この終わりの時代に初めて真理を聞く多くの人々が、安全の囲いへと受け入れられるだろう。Review and Herald, 1906年11月22日。

ミラー派の歴史は、終わりの時代において一字一句そのまま繰り返される。第一の天使の到来と歴史を特徴づけた「しるし」は、第三の天使の到来と歴史を特徴づける「しるし」を予表している。すべての聖なる改革運動は、終わりの時代における第三の天使の運動

と並行している。

地上における神の働きは、時代から時代へと、あらゆる大改革や宗教運動において顕著な類似を示している。神が人を取り扱われる原則は、いつの時代も同じである。現代の重要な運動には過去のそれに対応するものがあり、昔の時代における教会の経験は、私たちの時代にとって大いに価値ある教訓を含んでいる。『大いなる争い』 343頁。

黙示録18章の力ある御使いが象徴する歴史は第三の天使の歴史であり、第三の天使が象徴する歴史は、ミラー派の歴史における第一の天使と第二の天使の歴史と並行している。

神は、黙示録14章のメッセージに預言の系列の中での位置を与えられ、その働きはこの地の歴史が終わるまで止むことがない。第一と第二の天使のメッセージは今の時にもなお真理であり、後に続くものと並行して進むべきである。第三の天使は大声でその警告を宣言する。「この後」とヨハネは言った。「私は、大いなる権威を持つ別の天使が天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」この輝きの中に、三つのメッセージすべての光が結集している。『The 1888 Materials』 803、804。

第三の天使の働きと並行する第一と第二の天使の働きは、十人の乙女のたとえ話にも示されている。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

ヨハネの黙示録10章に示された歴史は七つの雷として表されており、この七つの雷は、ミラー派の歴史、すなわち第一と第二の天使のメッセージの歴史の中で起こった出来事を表している。七つの雷はまた、終わりの時代に起こる「将来の出来事」をも表しており、それらはミラー派の歴史における場合と同じ「順序」で成就する。

ヨハネに与えられ、七つの雷において表された特別な啓示は、第一天使と第二天使のメッセージのもとで起こる出来事の輪郭を示したものであった……

この七つの雷がその声を発したのち、小さな書について、ダニエルと同様に、ヨハネに命令が下る。「七つの雷が語った事柄を封じよ。」これらは、順を追って明らかにされる将来の出来事に関するものである。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971ページ。

すべての改革運動は互いに並行しており、十四万四千人の最終的な改革運動を示すために、それらは「行に行を重ねて」ひとつに組み合わされる。十人の乙女のたとえは、ミラー派運動と十四万四千人の運動における神の民の内的経験を例証している。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」 『大いなる論争』 393。

ミラー派と十四万四千人の働きとメッセージは、黙示録14章の三天使によって象徴されている。

私は、経験を得るための貴重な機会が与えられてきました。私は第一、第二、第三の天使のメッセージにおいて経験をしてきました。天使たちは天の中空を飛び、世界に警告のメッセージを宣言し、この地球の歴史の終わりの日々生きる人々に直接関係するものとして表されています。これらの天使の声を聞く者はいません。というのも、彼らは、天の世界と調和して働く神の民を表す象徴だからです。神の御霊に照らされ、真理によって聖められた男女が、三つのメッセージをその順序に従って宣べ伝えるのです。『ライフ・スケッチ』429頁。

黙示録第十章に描かれている預言的出来事は、七つの雷によって表されている。これらの出来事は、神性が人間性と結び合わされるところを示している。マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章でキリストが示された「しるし」は、ミラー派運動の到来を告げた「しるし」を表すとともに、十四万四千人の運動に対する並行する証しともなっている。十四万四千人は、エノクとエリヤに示されているように、死を味わうことがない。2001年9月11日は、地球の歴史の最後の世代の到来を示す「しるし」としてキリストが指し示されたものであり、そのことはルカ21章において言及されている。エノクとエリヤによって表され、「十四万四千」と呼ばれるその群れに加わるためには、その「しるし」とそれが意味するすべてを認識することが必要である。

イエスは、ミラー派運動の幕開けとなった「しるし」の歴史を順にたどるよう弟子たちを導いた後、同じ歴史を表すたとえ話を取り入れることによって、ご自身の歴史的証言を繰り返し、さらに詳述した。

そして、彼は彼らにたとえを話された。「いちじくの木、そしてあらゆる木を見なさい。芽を出し始めると、あなたがたはそれを見て、自分で夏がもう近いと知でしょう。同じように、これらのことが起こるのを見たなら、神の国が近づいていると知りなさい。まことにあなたがたに言う。この世代は、すべてが成就するまで過ぎ去ることはない。天地は消え去る。しかし、わたしの言葉は決して消え去らない。」ルカ21:29-33。

イエスはこのたとえを、単数の「いちじくの木」と「すべての木々」との区別を示すことから始める。「いちじくの木」は契約の民であり、終わりの時代においては、神の残りの民であると公言するラオディキア的アドベンチズムを指す。他の「木々」は異邦人であった。

信仰を公言する葉に覆われながら、そこには実が見いだされないユダヤ民族を表す、いちじくの木への呪いに注目せよ。いちじくの木に呪いが宣告された。この木は、神に呪われた、道徳的で思考し生きている主体を表しており、この出来事の後四十年間生き続けていたユダヤ人のように、生きてはいながらも死んでいたのである。注目せよ、他の木々、すなわち異邦人を表す木々は、葉で覆われてはいなかった。彼らには葉がなく、神を知っていると見せかけることもしなかった。彼らが葉を出し実を結ぶ時は、まだ来ていなかった。牧師と働き人への特別証言 第7号、59～61ページ。

終わりの時代のラオディキア的アドベンチズムは呪われている。なぜなら、それが神の残りの民であると公言していながら、その公言は実を結ばないからである。イエスはこの箇所、相互に関連しつつも異なる二つの点を示している。すなわち、神の民であると公言する者たちと、神の律法を堅く守ると公言せず、また預言の霊を持たない異邦人との区別

を明らかにしておられるのである。神の律法と預言の霊は終わりの時代の残りの民の特徴であり、ラオデキヤ的アドベンチズムはそれを堅持すると公言している。終わりの時代における「葉」は、ヨハネが黙示録で指し示した残りの民であると称する主張を表している。

「異邦人の世界は、葉も実もないいちじくの木々によって表されていた。異邦人は、ユダヤ人と同様に敬虔さを欠いていたが、神の御心にならなかつたと主張することはなかつた。彼らは高尚な霊性を誇ることもなかつた。彼らはあらゆる点で、神の道と御業に対して盲目であつた。彼らにとって、いちじくの時はまだ来ていなかった。彼らはなお、光と希望をもたらす日を待ち望んでいた。」『Signs of the Times』1899年2月15日。

いちじくの木と他の木々との違いについて、キリストはさらに一つの区別を示された。いちじくのために木々が芽吹く時期は、異邦人の木々が芽吹く時期とは異なっていた。終わりの日には「二つの明確な呼びかけが諸教会に与えられる」。そして、黙示録18章の御使いの最初の声は、十四万四千人のための芽吹きがいつ起こるのかを示している。黙示録18章の「第二の声」は、他の木々が芽吹く時を表している。

キリストの時代には、ユダヤ人はいちじくの木であり、異邦人は他の木々であつた。ミラー派の歴史では、プロテスタントはいちじくの木であり、ミラー派は他の木々であつた。終わりの時代には、ラオデキヤ的アドベンチズムはエルサレム（ぶどう園）から取り除かれる実のならないいちじくの木であり、十四万四千人は実を結ぶいちじくの木々である。いまだバビロンにいる神のほかの子らは、異邦人として象徴されている。

「異邦人」は、定義上「よそ者」である。異邦人の木々は休眠状態（死んでいる）で、いちじくの木が芽吹き、命を吹き返すときにも、芽も実もつけない。休眠中の木は乾いた木であり、そして、黙示録第十八章の第二の声によって異邦人がバビロンから出て来るようにと召されるとき、彼らは第七日安息日を守ることを選び、主と契約を結ぶようになる。

主に連なつた異邦人の子は、「主はわたしをその民から完全に切り離された」と言つてはならない。宦官もまた、「見よ、わたしは枯れ木だ」と言つてはならない。なぜなら、わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶことを選び、わたしの契約を固く握る宦官たちに、主はこう言われる。わたしの家の中、わたしの城壁の内に、彼らに息子や娘にまさる場所と名を与える。わたしは彼らに、断たれることのない永遠の名を与える。また、主に連なり、主に仕え、その名を愛してその僕となろうとし、安息日を汚さずに守り、わたしの契約を固く握る異邦人の子らも、わたしは彼らをわたしの聖なる山に連れて行き、祈りの家で彼らを喜ばせる。彼らの焼き尽くす献げ物といけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民のための祈りの家と呼ばれるからである。イザヤ書 56:3-7。

他国人は「異邦人」であり、「第二の声」は彼らにバビロンから出てくるよう呼びかけ、彼らは神の聖なる山へと導かれる。そのときそれは神の「聖なる」山となる。というのも、「第一の声」の歴史に表されている試練の過程によって、麦と毒麦がすでにより分けられているからである。終わりの日に彼らが主の山に来るとき、異邦人はもはや他国人

でも、枯れた木でもない。

太陽と月は暗くなり、星はその輝きを失う。主はまたシオンから咆哮し、エルサレムから御声を発せられる。天と地は震える。しかし主はその民の望み、イスラエルの子らの力である。こうしてあなたがたは、わたしがシオン、わが聖なる山に住むあなたがたの神、主であることを知る。そのときエルサレムは聖となり、もはや異邦人はその中を通らない。ヨエル書 3:15-17。

「第二の声」が神のもう一つの群れをバビロンから呼び出すという歴史の幕開けには、ミラー派運動のしるしによって型示された「しるし」がある。私たちが考察しているキリストの証言は、マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章に示されている。その三つの証言のそれぞれにおいて確認されている「しるし」の一つは、天の力が揺り動かされる、ということである。しかし、エルサレムが「聖」とされる時を示す「しるし」を表すヨエルの描写では、「天も地も揺り動かされる」とされている。

ヨエルは、エルサレムが聖なるときに起こると予言された「しるし」の完全な成就を示している。その時とは、主が十四万四千人から罪を取り除き、ラオデキアの教会がフィラデルフィアの運動へと移行した時である。そのとき、第六の運動（フィラデルフィア）は、七つの教会に属する第八の運動（フィラデルフィア）となる。そのとき、「戦う教会」は「勝利の教会」となる。「戦う教会」とは、麦と毒麦から成る神の教会を指す呼称である。「勝利の教会」とは、「聖なる」ものであり、「もはや異国人はその中を通って行かない」神の聖なる山のことである。

高く掲げられる旗印、すなわち凱旋の教会—それは「七に属する八番目」であり、エルサレムが「聖なる」とされる時—の到来には、「しるし」が伴う。ご自分の民が、十四万四千人の封印を識別する生死を分かち「しるし」を見分けられるための拠り所を与えるべく、イエスは樹木とその生の自然な循環を用いて、この何よりも大切な教訓を教えられた。

キリストは、ご自身の来臨のしるしを見張り、やがて来られる王のしるしを目にしたなら喜ぶようにと、その民にお命じになっていた。「これらのことが起こり始めるなら、見上げ、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいたからである。」また、春に芽吹く木々を指し示して言われた。「それらが今や芽を吹き出すとき、あなたがたは自分で見て、夏がもう間近にあることを知る。同じように、これらのことが起こるのを見たなら、神の国が近づいていることを知りなさい。」ルカ 21:28、30、31。大いなる論争、308。

春の木々が芽吹き始めると、夏は近い。

刈り入れは過ぎ、夏は終わって、私たちは救われていない。エレミヤ書 8:20。

芽吹く木々は春であることを示し、私たちは夏が近いことを知り、収穫が行われるのは夏である。

それらを蒔いた敵は悪魔であり、収穫は世の終わりで、刈り手は天使たちである。マタイ13:39

収穫は世の終わりに行われる。木々が芽吹き始めたら、世の終わりが差し迫っていることを知っていなければならない。

救い主のある言葉を、別の言葉を打ち消すために用いてはならない。たとえその再臨の日も時もだれも知らないとしても、それが近いことを知るようにと私たちは教えられ、また求められている。さらに、主の警告を無視し、その再臨が近いことを知るのを拒むか怠ることは、ノアの時代に生きた人々が洪水がいつ来るかを知らなかったのと同じように、私たちにとっても致命的であると教えられている。『大いなる論争』371。

次回の記事でルカの福音書21章の学びを続けます。

私は、地の勢力が今や揺り動かされており、出来事が順を追って起こっているのを見た。戦争と戦争のうわさ、剣、飢饉、疫病がまず地の勢力を揺り動かし、その後神の声が太陽と月と星、そしてこの地もまた揺り動かす。私は、ヨーロッパの勢力の揺れは、ある者たちが教えるような天の諸力の揺れではなく、怒れる諸国民の揺れであるのを見た。『初期の著作』, 41。